

1 咳痰の塗抹・培養検査の一致率について

2
3 ○嶋野美和, 高橋弘志, 秋倉史, 岩間暁子, 足達由佳里
4 (国保君津中央病院)

5
6 【目的】塗抹検査は, 感染症において菌種の推定から
7 抗生剤の選択ができ, 迅速診断において有用である。
8 今回, 推定が可能な *Streptococcus pneumoniae*,
9 *Haemophilus influenzae*, *Moraxella catarrhalis*
10 について塗抹・培養の相関及び乖離例について検討
11 したので報告する。【方法】2007年1月から12月ま
12 での1年間の下気道検体3,351件のうち咳痰と気管
13 内吸引痰850件をMiller&Jonesの分類で品質管理,
14 洗浄咳痰法を行いグラム染色でGeckler(以下G)の
15 分類をし, 培養を実施した。【結果】Miller&Jonesの
16 分類でP1~P3の咳痰は619/850件(72.8%)でその
17 うちG4とG5は, 414/619件(66.9%)が良質な咳痰
18 であった。塗抹・培養の一致率と推定菌種と培養の一
19 致率(ある菌種を推定しその菌種が分離される割
20 合:特異度)は, *S. pneumoniae* 151/253件(59.7%),
21 151/161件(93.8%), *H. influenzae* 112/253件
22 (44.3%), 112/124件(90.3%), *M. catarrhalis*
23 111/212件(52.4%), 111/126件(88.1%)であった。
24 また, 塗抹・培養陽性検体のうちG4とG5は各々
25 134/151件(88.7%), 100/112件(89.3%), 106/111
26 件(95.5%)と高い検出率であった。塗抹陰性・培
27 養陽性でG4とG5は, 各々56/102件(54.9%),
28 105/146件(71.9%), 66/101件(65.3%)であっ
29 った。不一致の原因として, 好中球優位で菌体消失して
30 いた検体が, それぞれ3件, 25件, 30件認められた。

31 【まとめ】推定菌種の一致率は, 88%以上と高く, ま
32 たGeckler4&5群が主体であった。しかし塗抹陰性
33 で培養陽性例は60%以下と低く, 原因の一端として
34 抗菌薬投与後の菌消失や, *H. influenzae* のように多
35 形成をしめす特徴をもつ菌種, また他の優位菌のた
36 め確認できなかったためと思われる。今後は, 技師の
37 技術を高めるとともに, 臨床より患者情報を入手す
38 ることにより, 精度の高い検査結果を提供したいと
39 思う。 連絡先:0438-36-1071 (3342)